

12. 甲状腺機能異常時における左心機能と末梢循環血流量の検討

中駄 邦博 塚本江利子 伊藤 和夫
加藤千恵次 川村 直之 古舘 正従
(北大・核)

甲状腺機能亢進症や分化癌に対する¹³¹I治療の際の前処置としての抗甲状腺剤ないし甲状腺ホルモン休薬が心機能と下肢末梢循環血流量に与える影響につき検討した。甲状腺ホルモン休止3~4週後のhypothyroidの状態においてLVEFの低下・PFRの低下はともに13例中10例(76.9%)にみられ、下肢循環血流量の低下は8例中7例(87.5%)でみられた。Euthyroid時に再検査した4例ではhypothyroid時に認められた左心機能・下肢循環血流量の低下はいずれも正常化ないし改善していた。甲状腺機能亢進状態では、発症後長期経過した例においてはCIとLVEFに解離が認められ、下肢血流量の亢進を伴った例はみられなかった。

13. 甲状腺癌骨転移症例における^{99m}Tc-MDPおよび¹³¹I scintigraphyの検討

下瀬川恵久 山崎 哲郎 清水 正宏
中村 護 坂本 彦彦 (東北大・放)

分化型甲状腺癌骨転移と判明し、¹³¹I内部照射を施行した12症例について、その骨転移巣38か所の描出に関して^{99m}Tc-MDPによる骨シンチグラフィ像、¹³¹Iによるシンチグラフィ像および単純X線写真上の所見を比較・検討した。その結果、1) cold lesionを加味しても¹³¹Iの方が^{99m}Tc-MDPよりも分化型甲状腺癌骨転移巣の描出に優れていると思われた。2) 単純X線写真上のlytic lesionの出現については^{99m}Tc-MDPより¹³¹Iの取り込みの程度の方に相関がみられた。3) 骨シンチグラフィ上のcold lesionの出現は¹³¹Iの取り込みの程度と相関があると思われる。

14. Malignant insulinomaによる骨転移の一例

山崎 哲郎 下瀬川恵久 清水 正宏
洞口 正之 中村 護 坂本 彦彦
(東北大・放)

症例は54歳女性。昭和48年12月低血糖発作で発症、インスリンノーマの診断にて翌年2月腓尾側切除。組織学的に悪性所見あり。

昭和59年1月腰痛を主訴に整形外科受診。X-p, 骨シンチ、および既往歴から転移性骨腫瘍の診断となり、第2腰椎・右肩甲骨に放射線照射を受けた。

同年8月胆嚢ポリープ様病変摘、11月胆嚢摘出術施行、組織診にてinsulinoma転移と確認。翌年1月の骨生検で骨転移も確認された。X-p上溶骨性・造骨性的変化が混在し、また4回にわたる骨シンチの所見の変化は比較的緩徐であった。本例は^{99m}Tc-MDPによる骨シンチでmalignant insulinomaの骨転移を診断し得た点で珍しい症例と思われる。

15. 血管柄付骨移植の骨シンチグラフィ

伊藤 和夫 塚本江利子 中駄 邦博
加藤千恵次 古舘 正従 (北大・核)
三波 明夫 佐久間 隆 (同・整外)

血管柄付骨移植を受けた16例に52回の骨シンチグラフィを施行し、骨シンチグラフィ所見の経時的変化に関して分析した。

移植骨の骨集積は移植に使用された骨の種類により異なることが示された。皮質骨では術後の骨集積は移植部位の骨と同程度であるのに対して、海綿状骨では明瞭な集積亢進が観察された。また、骨集積の認められなかった2症例では血管の閉塞が、集積亢進の乏しい1症例では移植骨への虚血状態が生じていた。移植骨への血流ならびに血液プールの状態も移植骨の血管開存および生着状態を判断するうえで骨シンチグラムを補足する情報が得られることが確認された。

移植骨の術後の血管開存ならびに生着状態の把握は移植骨の予後を判断するうえで臨床的に非常に重要であり、骨シンチグラフィはその補助診断法として十分利用しうる検査法である。